

今治歴史散歩

大成 経 凡

今治の埋もれた、魅力ある歴史文化を紹介する「ナー」です。第十四回は、藩政時代の今治地方の銘酒や酒造労働者・越智杜氏の由来などを紹介し、今治の酒造史を歴史散歩したいと思えます。

第十四回 今治の銘酒と越智杜氏

●銘酒「此花」「千代之友」

江戸時代中期の今治地方は、松山藩と今治藩の領域で二分され、大三島は松山藩領でした。同藩では、参勤交代道中の安全祈願祭を宮浦の大山祇神社で行い、藩主が直々に参拝することもありました。

明和三（一七六六）年八月の同社「神社日誌」には、藩主参拝を一カ月前に控えた、藩と神社とのやりとりが記されています。前例に従い、用意するお神酒を「三原御前酒」「瀬戸田鶴齡酒」の芸備（広島県）の酒二銘柄とするよう神社に指示がありました。

しかし、十二代藩主松平勝善には芸備の酒が口に

合わなかったのでしょうか。嘉永六（一八五三）年六月の日誌には、藩の指示で桜井油屋の「此花」と拝志伊勢屋の「千代之友」の二銘柄を取りそろえたとあります。

当時の桜井は松山藩預かりの天領で、油屋とは元禄十一（二六九八）年創業の村上酒造のことです。大正十二（一九二三）年に蔵を焼失して昭和初年に酒造家を廃業しますが、明治以降は「萬歳春」「花王井」の銘柄で第十一師団の御用酒となり、各種品評会でも上位成績を収めています。



大山祇神社境内の酒樽
（拝殿前の回廊。近くに酒殿もある）

当時の拝志は今治藩の在郷町で、ここで町年寄を務める伊勢屋渡辺家（東村庄屋渡辺家の分家）が、藩から酒造営業の許可を得ていました。ただ、腐造が原因で明治以降（明治後期か）に廃業しています。その子孫が、絵本作家の長野ヒデ子さんです。

●山丹八木酒造部のルーツ

一方、今治の老舗酒造メーカーに「山丹正宗」の八木酒造部があります。そのルーツは江戸時代後期にさかのぼり、本町で醤油醸造と木綿商を営む丹波屋・八木治平が、天保五（一八三五）年に今治藩から酒造営業の許可を得たことに始まります（丹波屋創業は天保二年）。藩主への醤油献上で信頼を得、その商才で御用商人へと躍進します。

明治後期以降、醤油・酒造・木綿商を柱とする舟八木本家商店の経営は八木春樹が担います。彼は明治三十七（一九〇四）年に酒造を専業とすることに決め、大正初期から社名広告に「八木酒造部」の名が見られるようになります。一方で、今治電気株や今治商業銀行の重役、今治市議会議長や貴族院議員などを務めています。

昭和四（一九二九）年刊行の『四国醸造業界史』によると、当時、今治市・越智郡には三〇の酒造場がありました。その中で年産約二二〇〇石の最大造酒量を誇ったのが八木酒造部（醸造場二カ所）で、清酒「舟正宗」は四国では讃岐の「金陵」に次ぐ名声を誇りました。これには、参謀役・山岡廣松（伯

方島出身)の手腕が影響したようです。

こうした中、八木春樹は愛媛県酒造組合連合会長・今治酒造組合長・全国酒造組合連合会相談役などを務め、昭和三年秋の全国酒類品評会で「丹正宗」は一等賞を受領。東京にも多量出荷しています。



八木酒造部の広告記事
(大正9年5月21日の海南新聞)

●越智杜氏と酒呑み坊さん

かつて愛媛県内には、二つの大きな杜氏集団(酒造労働者)がありました。越智郡島しょ部を拠点とする越智杜氏と佐田岬半島を拠点とする伊方杜氏です。大正十一(一九二二)年刊行の『酒造乃心得』によれば、越智郡醸酒業組合(後の越智郡杜氏組合)



越智杜氏による床もみ作業
(昭和40年代頃撮影/現代の名工・田窪幸次郎氏提供)

の杜氏数は一三〇八名で、これは全国四十八の組合の中で六番目の規模でした。

越智杜氏は出稼ぎ労働者が多く、宮窪出身者が多いことで「宮窪杜氏」とも呼ばれました。醸造技能に優れたことで、県内はもとより、香川・徳島・九州方面にも出稼ぎに出向き、冬季中の生業としていました(夏季は一般に塩田労働者として働く)。

昭和三十年代をピークに、越智杜氏の数は減少しますが、その背景にはビール製造量の増加にともなう零細醸造場の廃業や、地場産業の変容などがあります。宮窪周辺では、柑橘・石材・造船業などがこ

れに代わる生業となり、遂に平成十五(二〇〇三)年には越智郡杜氏組合も解散に至ります。

宮窪杜氏のルーツでよく紹介されるのが、宮窪町・海南寺の「酒呑み坊さん」(日切地蔵)です。これは、寛政二(一七九〇)年に同寺十六代住職となった円乗(えんじょう)のことで、酒好きの彼が灘(なだ)(神戸市)から醸造法を伝えたと言われます。また、宮窪の高取山頂上の金毘羅さんには、安政二(一八五五)年銘の石灯籠に「酒屋親父中」として十二名の地元寄進者の名が刻まれています。すでに幕末期には、出稼ぎの杜氏がいたようです。



海南寺の酒呑み坊さん(宮窪町宮窪)